

---

# ホープ～魔法の世界にも希望を～

生時(レジェンド)

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホープ〜魔法の世界にも希望を〜

### 【Nコード】

N1849F

### 【作者名】

レジエント  
生時

### 【あらすじ】

「ホープ」の番外編です。今回はファンタジー小説を書いてみました。

## 第1章 希望の戦士達

作者からのメッセージ

今回の物語は、「ホープ」まだ見ぬ明日にも希望を」の番外編です。

読んでない方は、読んでくださると嬉しいです。

もちろん読んでない方にも分かるように、解説を入れて書くつもりです。

前からファンタジーものを書きたいと思っていまして、「ホープ」の番外編で、ファンタジー小説を書いてみようと思います。

「ホープ」の番外編なので、格闘やギャグの要素も入れようと思っています。

あと、誰が話しているか分かるように、「」の前にキャラの名前を書くことにしました。（ゲームのRPGをやるときみたいに、読むと読みやすいかな・・・）

では、皆さんと一緒に、不思議な世界へ冒険の旅に出かけましょう。

彼女はまだ知らない・・・

自分の国の魔法世界が今どうなっているかを・・・

ミサ

「上夫、一緒に天馬の散歩に行こうよ」

ミサ・・・この物語のヒロイン。魔法世界から、結婚相手を探しに、この世界にやって来て、この物語の主人公、愛上夫あいうえおと出会い、恋人となり、現在は同棲している。

二十二歳なのだが、普段は十五歳くらいの童顔でかわいらしい感じ

の子だが、酒を飲むと容姿や言葉使いが大人の女性になり、牛乳を飲むと元に戻る魔法使いである。

セイヤ

「相変わらずかわいいだろう。俺の子は」

セイヤ・・・神様の間違いで、人間として生まれてくるはずだったが、犬の姿で生まれてきてしまった犬人間。（周りからは化け犬と呼ばれている）

未亡人の上夫の母と結婚し、天馬という子どもを授かる。

ただし、彼も顔は人間だが、体は犬、昔、都市伝説になった人面犬みたいな姿である。

愛子

「おい、<sup>ソイツ</sup>天馬を外に出すと大騒ぎになるぞ！おい、アニキ！」

大岩愛子（旧姓は愛）・・・上夫の妹で、元ヤンで、兄から格闘技を学んでいる。

イジメが嫌いで、いじめられていた大岩力也という同級生を助けて、その後、結婚した。

「ホープ」の時は中二だったが、現在は十六歳の主婦である。

上夫

「久々に実家に帰ってきたら、相変わらず面倒のかかる一家だぜ」

愛上夫・・・主人公。変な名前以上。

上夫

「コラ！作者！何で俺だけ適当な解説なんだ！」

・・・

上夫

「シカトするな！俺主人公だろう」

して代

「天馬ちゃんは、お母さんが観ているから、久々に皆で出かけてきなさい」

愛して代・・・上夫と愛子と天馬の母で、セイヤの妻。

のんびりした性格で、何事にも動揺しない。

化け犬扱いのセイヤを、して代だけは、結婚前から人間と同じように接する優しい女性である。

力也

「義お母さん、天馬ちゃんは僕が観ていますから、休んでいてください」

して代

「あら、ありがとうね力也君。」

ミサたちは、よく行く喫茶店「LUNA」に向かった。

その時、道端でケガをしている老人が倒れていた。

ミサ

「おじいちゃん！」

老人

「ミ、ミサ・・・か・・・？」

上夫

「ミサの知り合いか？」

ミサ

「私の祖父です」

普段のミサは、テイションがかなり高い。  
一日一緒にいたら、かなり疲れる事だろう。

ミサ

「おじいちゃん、この人が私の彼氏の愛上夫、私はウツチーって呼んでるのよ」

老人

「ハアハア・・・孫がお世話に・・・イタタタ・・・お世話に・・・」

上夫

「・・・ミサ、お前の魔法でケガを治してやれよ」

ミサ

「あつ、ゴメン、忘れてた。」

上夫

「おいおい」

ミサ

「マジカル、マジカヨ、マジダネ、マジヤバイ・・・」

ミサは回復系の呪文を唱え、祖父の傷を治した。

老人

「ウンチーさんでしたか？」

上夫

「作者！俺の名前をさらに変な風にするな！」

ミサ

「ウンチーじゃなくて、ウツチーだよ」

老人

「こりゃ、すまんかった。」

ミサ

「そんな事より、おじいちゃん何しに来たの？何でケガしてたの？」

上夫

「ここじゃあ、何だし、瑠奈さんのところで話を聞こつよ」

喫茶「LUNA」・・・

龍一

「いらっしやいませ」

ミサ

「こんにちは。瑠奈さん、龍一さん」

上夫や愛子も二人に挨拶をした。

瑠奈

「あら、皆久しぶりね」

神威龍一・・・「武勇伝」の主人公。

容姿は女の子みtainな感じの青年だが、天神流という古武術の十八代目継承者である。

小学時代の龍一は、父親が「伝説の格闘王」と呼ばれた格闘家だったのに、龍一自身は弱いたためイジメられていた。

そんな時に、月形瑠奈に助けられ、弟子となり、そして、結婚し、現在は聖華という娘がいる。

神威瑠奈（旧姓は月形）・・・天神流の十七代目で、龍一の妻である。

普段は喫茶「LUNA」を経営しているが、十七歳の頃から結婚するまでは、「アルテミス」と呼ばれるスイーパーでもあった。

瑠奈は、母親を幼き頃事故で亡くし、十七歳の時に、父親と恋人がある悪魔との戦いで亡くし、その後、龍一と出会うまで、一人で裏社会を生きてきた女性である。

上夫

「この店ならヤバイ話にしても大丈夫ですよ」

老人

「実は、ワシらの国が大変なんじゃ」

ミサ

「どついうこと？」

老人

「狂った魔法使いが、魔法の国を支配しようとしている」



ミサ

「誰なの？」

老人

「奴の名は、ウエオハ・アクダーじゃ」

上夫

「（なんて、名前だ・・・これじゃあ俺が、悪人みたいに聞こえる）」

老人

「ウエオハ・アクダーは、カールと言う大魔法使いの弟子じゃった。だが、カールは去年病気で亡くなった・・・それからじゃ！ウエオハ・アクダーが我が国を支配しようとし始めたのは・・・」

上夫

「あ、あの・・・ソイツをフルネームで呼ぶのをやめませんか？」

老人

「そうか・・・まあとにかく、ウエオハみたいな奴は最低な男じゃ！」

上夫

「なんか僕が、最低の男のように聞こえるんで、アクダーをお願いします」

黙って聞いていたセイヤが、笑いながら、「上夫は最低な男・・・」と、何度も呟き始めた。

ムカついた上夫は、セイヤに鉄拳を喰らわせた。

老人

「悪い魔法使いのほとんどが奴の手下になった。そして、奴らは、百年前に伝説の勇者によって、封印された大魔王を目覚めさせようとしている。それを阻止するため、戦が始まったんじゃない」

上夫

「それですごいケガをしていたのですね」

老人

「イヤ、ワシは怖いからこの世界に逃げてきた。まあ、久々にミサに会いたかったし・・・でも、この世界に来たら、ガラの悪い、餓鬼共に殴られ、金まで取られた」

愛子

「お前も十分、最低な男じゃねーか」

上夫

「愛子・・・すいません。妹は口が悪くて・・・」

老人

「どこの世界にも悪人はいるんじゃない」

愛子

「私の事か？」

老人

「ち、違います。さっきの餓鬼共です。」

愛子に恐怖を感じ、思わず敬語を使うミサの祖父・・・

ミサ

「でも、おじいちゃん、何で酒を飲まなかったの？」

老人

「おお！恐怖で忘れていた」

上夫

「この人も酒を飲むとなんかなるのか？」

ミサ

「うん！龍一さん、お酒なら何でもいいので、持ってきてくれますか？」

龍一

「かしこまりました」

しばらくして、龍一が、ビールを持ってきた。

そして、ミサの祖父がビールを飲むと、カッコイイ二十代くらいの男性になった。

ミサもビールを飲み、大人姿になった。

ミサ

「おじい様は、お酒を飲むと、若返るのです」

ミサの口調が上品になった。

老人

「申し遅れたが、俺の名はドランだ。俺は魔法の世界に戻って、アクダーたちを倒す！」

ミサ

「おじい様、私も行きます」

セイヤ

「上夫、彼女の国が危ないのに、お前は行かないのか？俺は行くぜ！魔法の世界を守りたい！」

上夫

「何お前まで、キャラ変えようとしてるんだ。」

ミサ

「ありがとうセイヤさん」

上夫

「分かりました。俺も武道家です！一緒に行きます！」

上夫もカツコイイことを言っているが、実は大人姿で美人となったミサの前でカツコイイところを、見せただけである。

愛子

「このメンバーじゃ心配だから、私も行ってやるよ」

龍一

「ルナさん、面白そうですね。僕らも行きますか？」

瑠奈

「そうね。私たちも行きますわ」

こうして、アクダーを倒す戦士達が集まった。



## 第1章 希望の戦士達（後書き）

最近忙しいです><

調子も悪いですが、ミサたちと一緒に、冒険の旅をしたいと思いま  
す^^

## 第2章 新たな仲間

謎の男

「魔法の世界・・・面白そうだね」

本を読みながら、無言でミサたちの話を聞いていた一人の青年が、ボソツと呟いた。

上夫

「あれ！？お客って他にいたんですか？」

青年は立ち上がり、ミサたちのほうに近づいた。

上夫たちは青年の顔を見て驚いた。

セイヤ

「しょ、生時さん・・・」

謎の男の正体は、なんと作者の生時であった。

生時

「僕の気配に気づかないとは、武道家としてまだまだ未熟だね」

生時・・・クローン病という難病と闘う青年で、「ホープ」や「武勇伝」などの作者である。

格闘技が好きで少林寺拳法と空手を学んだ事がある青年だ。

上夫

「気配に気づかなかったんじゃない、アンタの存在感がないだけだ

ろう。そんな事より、俺だけ解説が適当だったぞ！大体アンタの解説なんて必要ないだろ！」

セイヤ

「また、現実逃避ですか？」

生時

「まあ、しょうがないから、行つてあげよう」

上夫

「来るな！帰れ！ジャマだ！」

生時

「上夫君、僕は作者だよ。その気になれば、生時は一人でアクターを倒した・・・と言うストーリーにする事が出来るんだぜ！でへへ」

上夫

「そんなの誰も読みたくねーよ！何が、でへへだ！」

ドラン

「無駄話はそれまでだ！時間がない、急いで魔法の国へ行くぞ！」

愛子

「コイツがあのだジジイと同一人物とは思えんな」

龍一

「どつやって行くんですか？」

生時

「ドラちゃんから四次元ポケットを借りて・・・」



上夫

「頼むで、喋るな」

ミサ

「私たちが持っているこの指輪で、魔法世界への扉を出します。」

ミサが呪文を唱えると、指輪が光、その光から魔法世界に通じる扉が出てきた。

上夫

「この向こうに、魔法の国が・・・」

ドラン

「行くぞ！」

こうして戦士達はアクダーを倒すため、魔法の国へ向かった。

## 第2章 新たな仲間（後書き）

また僕自身を登場させてしまった・・・

### 第3章 魔法の世界

戦士達はついに魔法の世界にやって来た。

上夫

「ここが魔法の世界・・・」

ミサ

「ここは私の生まれた街・・・ファンタリムです」

ミサの故郷ファンタリムは、中世ヨーロッパを感じさせる街だったが、今はアクダーたちとの戦いで、荒地となっていた。

戦士達が街を歩いていると、後ろからミサを呼ぶ声が聞こえた。

マーマ

「ミ、ミサ！」

ミサ

「お母様！」

後ろからミサを呼んでいたのは、ミサの母マーマであった。

ミサ

「お父様は？」

マーマ

「・・・家に来なさい」

戦士達はミサの家に入っていた。

家の中には、大怪我をしているミサの父、ナイトが寝ていた。

ミサ

「お父様・・・」

ママ

「あなた、ミサが帰ってきましたよ」

ナイト

「うつ・・・ミ、ミサか？」

ミサ

「お父様、今私が回復系の魔法で・・・」

ナイト

「む、無理だ・・・俺はアクターの・・・ハアハア・・・魔法で毒に侵されている・・・お前の・・・魔力では治せん・・・」

ドラン

「ナイト、すまない・・・俺が逃げなければ・・・」

ナイト

「ち、父上・・・ミ、ミサを・・・お願いし・・・ます・・・ミ、ミサ・・・最後に・・・お前の顔が見えて・・・良かった・・・」

ミサ

「お父様？」

ミサの父、ナイトは、永遠の眠りについた・・・

しばらくの間、無言の時間が続いた・・・

それから数時間後・・・

瑠奈がミサのために牛乳を持ってきた。

ミサ

「瑠奈さん・・・」

瑠奈

「今の姿だと、泣きたくても泣けないでしょ」

ミサは牛乳を飲み、子ども姿に変わった。

そして、大声で泣いた・・・

そんなミサを、瑠奈がそつと抱きしめた。

### 第3章 魔法の世界（後書き）

今回はシリアスな話にしてみました。

## 第4章 メシア王国

次の日・・・

ミサの父ナイトの埋葬が行われた。

ミサ

「パパ、必ずアクダーを倒し、この国を平和な国にします」

それから数時間後・・・

上夫は、強くなるための特訓をしていた。

上夫が特訓をしていると、覆面をした者が襲い掛かってきた。

上夫

「お前、アクダーの手下か？」

覆面

「・・・」

上夫

「話す気はないか・・・」

そして二人の戦いが始まった。

上夫の攻撃をすべて交わす謎の覆面・・・

そして、覆面の回し蹴りが直撃した。

上夫

「つ、強い・・・だが、見たことのある戦い方だ・・・」

上夫は何度も攻撃を仕掛けるが、すべて紙一重で交わされている。

上夫

「（落ち着け・・・アクダーへの怒りで、相手に俺の動きを読まれている・・・冷静になれ・・・そして、気合いの入った一撃を与えれば勝てる！）」

覆面が攻撃しようとした瞬間・・・

上夫の気合の入った正拳突きが覆面に炸裂した。

覆面はふっ飛んだが、一回転し着地した。

覆面

「いい一撃だ！上夫君」

上夫

「その声は、龍一さん！？」

覆面の正体は龍一だった。

覆面を取り、血がついている口元を手で拭いた。

龍一

「君の強さを知りたかったんで、ためさせてもらった」

上夫

「やはり龍一さんには敵いませんね」

龍一

「だが、さっきの一撃は良かったよ」

上夫にとって、龍一は憧れの武道家・・・  
そんな彼に誉めてもらえたのだから、上夫は嬉しかった。



そして、二人はミサの家に戻った。

家の中では、老人に戻ったドランが叫んでいた。  
ドランはミサと違い、酒を飲んでから五時間経つと、元の老人の姿に戻るのだ。

ドラン

「ワシは怖いから行きたくない！」

ミサ

「おじいちゃん」

ドラン

「アクダーって、すごく強いんだぞ！だから行かない！」

ミサ

「仕方ない・・・お酒を飲ますか・・・」

ドラン

「酒だ！わーい、わーい」

ドランは酒を飲み、若返った。

ドラン

「息子の敵は俺が討つ！」

愛子

「ホント変わったジジイだぜ」

ミサ

「おじいちゃん、若い頃は、勇敢な魔法使いだったらしいの」

上夫

「だから若返ると、勇敢になるのか」

生時

「あのく、この世界に来たのはいいけど、俺、金、土、日は仕事なんだけど・・・」

上夫

「知るか！そんなの！ていうか、ジャマだから帰れ！」

生時

「そんなこと言うと、生時が一人でアクダーを倒し、ついでに裏切り者の上夫を退治した・・・というストーリーにするぞ・・・そして瑠奈さんを俺の嫁に・・・でへでへ」

上夫

「分かったよ（何でコイツが作者なんだ・・・）」

愛子

「ところで、これからどこに行くんだ？アクダーって奴はどこにいるんだ？」

ドラン

「それは分からん・・・とりあえず、この近くにあるメシア王国の王が無事か確かめに行きたい」

ミサ

「そうね・・・じゃあ、ママ、行ってくるね」

ママ

「気をつけてね」

戦士達はメシア王国へ向かった。

#### 第4章 メシア王国（後書き）

金、土、日、と仕事行くのイヤだな

## 第5章 伝説の勇者

メシア王国に向かって、戦士達は歩いていった。

上夫

「さっきから、一人ニヤニヤしてる奴がいるんだが・・・キモイぜ」

愛子

「どうせくだらないことを考えているんだろう」

ニヤニヤして歩いているのは作者の生時だ。

生時

「（瑠奈さん、ぼ、僕あなたのことが好きでした・・・私に惚れると大変ですよ・・・僕は本気です！僕を男にしてください！・・・いいわよ。リュウの事は忘れて、生時さんの女になってあ・げ・る！・・・瑠奈はそつと生時を抱きしめ、キスをした・・・でへへ・・・）」

上夫

「おい、作者！大丈夫か？」

生時

「ん？・・・だ、大丈夫・・・それにしてもロージア国・・・？ロージアはルナシーの曲だった・・・俺が一番好きな曲・・・曲は関係ないか・・・うらめしやゝ王国・・・違うな・・・あつ飯屋王国だ」

上夫

「作者・・・静かにしてくれ」

生時

「はい・・・（俺は作者だぞ！一番工口い・・・じゃない偉いんだぞ！・・・生時さん、私が元気にしてあ・げ・る・・・ありがとう瑠奈さん・・・よし、次の作品は僕と瑠奈さんの恋愛モノを書こう・・・）」

瑠奈

「大丈夫ですか？」

生時

「瑠奈さん、僕と結婚しよう」

生時の頭の中は、妄想と現実が、ごちゃ混ぜになっていた。

瑠奈

「・・・」

生時

「僕は作者だ・・・龍一君には、違う女性と結婚したと書き直しますから・・・次の作品は、瑠奈さんと僕の恋愛小説を書くよ！」

上夫

「おかしい奴と思っていたが、ここまでおかしい奴だとは・・・」

その時、戦士達の前にモンスターが現れた。

ミサ

「スライムサマ！」

愛子

「何でスライムに様なんか付けるんだ？」

ミサ

「スライムサマまでが名前なのよ」

生時

「俺に任せろ！」

スライムサマは、生時に恐怖を感じ、逃げた。

上夫

「おい！それでいいのか！？作者敵が出てきたら、全部、生時に恐怖を感じ、逃げた・・・と書くつもりか！？」

生時

「まさか・・・今回だけだよ・・・この裏技使うのは・・・」

上夫

「裏技って何だよ！？」

ドラン

「おい、喧嘩するな！それより急ぐぞ！」

戦士達は再びメシア王国に向かった。

2時間後・・・

戦士達はやっと王国に着いた。

ドラン

「着いたぞ！ここがメシア王国だ」

ミサたちの街とは違い、この国の建物などは、あまり壊れていない。

上夫

「この街は、襲われていないのか？なら王様は無事か・・・」

村人A

「違う！この国は、アクダーの四天王の一人、ブラック・ドリーマーが支配しているんだ」

村人B

「奴は夢を操る事ができる。夢の中で人が殺せるんだ」

セイヤ

「キョンシーみたいだな」

龍一

「タイトルが違うよ。13日の金曜日だよ」

愛子

「違う！バタリアンだ！」

セイヤ

「キョンシーですよね・・・生時さん」

生時

「ん？僕はキョンシーよりジャッキー・チェンの映画が好きだな」

セイヤ

「そんなこと聞いてないよ」



村人C

「エルム街の悪夢だ！バゝカ」

上夫

「何だアイツは！大体、なんで、この世界の人間が、俺達の世界の映画を知っているんだ」

村人B

「ブラック・ドリーマーは、この国の姫、レイラ様を気に入り、姫様は、この国を守るため、自らブラック・ドリーマーのところへ・・・」

ドラン

「そうか・・・王は無事か？」

村人B

「ああ、ご無事だ」

ドラン

「そうか」

ドランたちは城に向かった。

兵士A

「何だお前らは？」

ドラン

「王に会いたい・・・ドランが来たと王に伝えてくれ」

兵士B

「ド、ドランさま!？」

兵士A

「・・・！百年前に、この世界を救ってくださった・・・あの伝説の勇者ドラン様ですか？失礼しました」

兵士は急いで、ドランが来た事を、王に伝えに行った。

上夫

「まさかアンタが、伝説の勇者だったのか？」

ミサ

「ホントなの・・・おじいちゃん」

ドラン

「ああ・・・だが百年も前のこと・・・今の俺はただの隠居・・・だから俺やナイトやマーマは、お前に話さなかった・・・話す必要がなかった。それだけだ」

王室・・・

兵士A

「国王、ドラン様がお見えになりました。」

国王

「何！？ドランじゃと・・・だが、ドリーマーの手下が変装しているかもしれん・・・本物がどうか確かめよ」

兵士A

「ハッ」

上夫

「兵士が戻ってきた」

兵士A

「無礼は承知・・・しかし、貴方が本物のドラン様か試させてもらいます」

ドラン

「仕方ない」

だが、5時間経ったため、元の老人の姿に戻ってしまった。

ドラン

「だから来たくなかったんじゃ・・・ミサ、助けてくれ」

兵士A

「やはり偽者！」

上夫

「仕方ない・・・俺達が食い止めるから、ミサ、酒を買ってきてジーさんに飲ませるんだ」

ミサ

「うん」

ドラン

「ミサ、ちびっちゃたから、下着も買ってきてくれ」

ミサ

「・・・分かった」

上夫、愛子、龍一、瑠奈が兵士達と戦い始めた。

兵士D

「っ、強い！」

セイヤとドランは震えながら隠れていた。

生時

「俺の相手は貴様か！・・・手ごわい奴が相手だな」

生時はゴキブリと戦っていた。

だが、虫嫌いの生時には強敵だ。

しばらくして、ミサが酒と下着を持って帰ってきた。

ドランは下着を変え、酒を飲み若返った。

ドラン

「お前らそれでも兵士か？弱すぎるぞ！」

兵士E

「な、何だアイツは・・・アイツも強いぞ」

国王

「やめい！」

国王の一声で、戦いは終わった。

ただ、一人だけゴキブリとまだ戦っている馬鹿がいた。

国王

「どうやら貴方は本物のドラン殿・・・無礼お詫びする・・・」

ドラン

「気にしてないぜ！（老人姿の時にちびったのは気にしているが・・・）」

国王

「ワシは非力じゃ・・・国を守るどころか、自分の娘一人も守れなかった・・・」

ドラン

「・・・」

国王

「ところであの者たちは？」

ドラン

「別の世界から、この世界を救いに来た戦士達だ」

国王

「そうか・・・戦士たちよ・・・どうか、ドラン殿と力を合わせこの世界を救って下され」

国王は土下座をし、頭を下げた。

上夫

「任せてください！まず姫様を助けに行きます」

国王

「感謝する・・・ブラック・ドリーマーは、ここから北に向かって数キロあたりに屋敷がある。おそらく姫とそこにいるはず」

上夫

「じゃあ、姫様を助けに行きますか」

戦士達はレイラ姫を助けるため、北に向かった。

その頃生時は、やっとゴキブリを倒す事が出来た。

生時

「やべー、明日仕事どうしよう・・・瑠奈さんと僕の恋愛小説も書きたいのに・・・」

といいながら、彼も北へ向かった。

## 第5章 伝説の勇者（後書き）

勇者ドラゴン・・・レベル23（老人姿は0以下）、格闘家上夫・・・  
レベル11、魔法使いミサ・・・レベル7、ヤンネー愛子・・・レ  
ベル8、武道家龍一・・・レベル38、スーパードロップ・・・レベ  
ル38、病人生時・・・レベル1、化け犬セイヤ・・・レベル1

## 第6章 ブラック・ドリーマー

レイラ姫を助けるため、北へ向かう戦士達……  
だが、生時が急に立ち止まった。

生時

「皆、大事な話がある。聞いてくれ」

上夫

「どうせ、明日仕事だけど、どうしよう……って話だろ」

生時

「そんなくだらん話じゃない！俺達は、この世界を救う戦士なんだぞ！」

上夫

「じゃあ、話してみろ」

生時

「実は……この小説のタイトルを、ホープから、生時と瑠奈のラブストーリーに変えようと思うんだが……」

上夫

「……馬鹿を本気で相手するんじゃないかった」

生時

「（生時さん、まだ二人だけの秘密でしょ……すいません瑠奈さん・しょうがない人ね……そう言っつて、瑠奈は生時に優しくキスをし



た・・・でへ・・・」

また瑠奈との恋愛を妄想し、ニヤニヤしながら歩き始めた。

愛子

「アニキ、もうアイツやばいんじゃない」

上夫

「もう手遅れだ」

龍一

「生時さん、ルナさんは僕の妻なんだけど・・・」

生時

「ん？大丈夫だよ。君のも書いてあげるから、タイトルは、龍ちゃんとミサちゃんのラブラブ物語・・・」

ミサ

「私の彼氏はウッチーだけなの」

生時

「ミサちゃん、君が龍一君と付き合えば、僕が瑠奈さんと付き合える・・・それでいいじゃないか」

ミサ

「でも・・・」

瑠奈

「生時さん！」

生時

「はい！」

瑠奈

「ズボンが破れていますよ」

生時

「さっきのゴキブリとの戦いで服がボロボロだ・・・」

ミサ

「私ゴキブリ嫌い！よく倒せたね」

生時

「（破けたモノ縫ってあげるから、服脱ぎなさい・・・でも瑠奈さん、僕、病弱な体だから・・・生時、恥ずかしい・・・そういう照れたところがかわいいわよ・・・る、瑠奈さん・・・でへへ・・・）」

ミサ

「ほんとに変わった人・・・」

ドラン

「おい、屋敷があるぜ」

上夫

「あの中に姫が・・・」

生時

「どうやって、姫を助けるかが問題だ！ブラック・ドリーマーは夢を操れるんだろう」

上夫

「きゅ、急にマジになるなよ・・・」

ドラン

「い、いかん・・・そろそろ5時間・・・」

5時間経ったため、ドランは老人に戻った。

ドラン

「怖いよ・・・ブラック・ドリンクだかコーヒーだが知らんが、ワシ帰りたい」

生時

「落ち着いてください！ドラさん」

上夫

「（作者が真面目になったと思ったら・・・今度はジーさんか・・・）」

ミサ

「よしよし、怖くないよ・・・ちゃんとさっきの街で、お酒もらってきたから・・・」

再びドランは若返った。

ドラン

「伝説の勇者の俺に、怖いモンなんかネーよ」

上夫

「こうなったら、皆で倒しに行こうぜ！」

戦士達は堂々と屋敷の中に入っていった。

ブラック・ドリーマー

「よく来たな！」

二階から戦士達を見下すブラック・ドリーマー・・・  
姿はまるで、死に神のようだ。

生時

「死に神・・・クソ！デスノートがあれば、あんな奴すぐ殺せるのに・・・」

上夫

「（コイツ、本気で言っているのか、冗談で言っているのか、もう分からん）」

生時

「デスノートと言えば、小畑先生のサイボーグじーちゃんGも、じーちゃんがかつこよく若返るよな！」

上夫

「・・・」

ドラン

「レイラ姫は無事か？」

ブラック・ドリーマー

「ああ・・・今は夢の世界にいる・・・さあ皆さんも夢の世界へどうぞ・・・」

ドリーマーの手から煙が出てきた。

上夫

「ゴホッ・・・睡眠ガスか？」

夢の世界・・・

だが真っ暗で何も無い世界・・・

上夫

「うつ・・・ここはどこだ？まさか夢の中？」

愛子

「アニキか？ここはどこだよ？」

ミサ

「真っ暗で何も無い」

セイヤ

「俺達、死んだのか？」

ドラン

「ここは奴の世界か・・・」

ブラック・ドリーマー

「私の世界へようこそ」

ドリーマーが現れた瞬間・・・周りが光った。  
そして、ドリーマーの後ろには女性がいた。  
レイラ姫だ。

ブラック・ドリーマー

「ここから出るには、私を倒さないと出られない・・・だが、ここでは、お前達は私に触れる事ができない・・・逆に、私は攻撃ができる・時間をかけて、ゆっくりと殺してやろう・・・ん？確か奴らは八人いたはず・・・二人・・・いや三人足らんぞ・・・まさか！」

現実の世界・・・

ブラック・ドリーマー

「ここにもいないぞ・・・寝ている奴らの人数は五人・・・どうやら三人とも逃げたか・・・まあいい・・・あの五人を殺しに戻るか」

龍一

「僕たちは逃げていないよ」

ドリーマーが上を見ると、二階には龍一、瑠奈、生時の三人がいた。

生時

「さつきはよくも俺達を見下してくれたな」

ブラック・ドリーマー

「な、何故お前達には睡眠ガスが効かない？」

龍一

「僕とルナさんは、煙が出た瞬間に、ここまで跳んだ・・・あんたは夢中になっていたから、僕たちの気配に気づかなかっただけ・・・」

生時

「俺は普段から、強い眠剤などを、飲んでいるから、効かなかったのさ」

瑠奈

「あなたの負けね」

そう言つて、瑠奈は跳んで、一回転し、ドリーマーの頭にかかと落とし、そしてもう片方の足で、蹴り飛ばした。

これは天神流の技の一つ天誅である。

さらに、ドリーマーが壁に激突したと同時に、苦無が額に刺さり死亡した。

そして上夫たちは目を覚ました。

レイラ姫は、二階の部屋で椅子に縛られていた。

瑠奈たちはついに姫を救い出した。

そして、姫をメシア王国まで送り、再び北に向かって旅に出た。

## 第6章 ブラック・ドリーマー（後書き）

三日で6話も書いてしまった。

仕事から帰ってきて、調子良かったら、続きを書こうかな・・・



## 第7章 アクダー登場

戦士達は北へ向かって歩いていった。

ミサ

「おじいちゃん疲れた〜、休憩しようよ〜、大体、何で北に向かっているの?」

ドランが立ち止まった。

ドラン

「少し、休憩するか・・・」

生時

「賛成！僕は皆が知らない間に、作者の力で現実世界に戻り、ちゃんと仕事してきたんだぜ！」

上夫

「そのまま戻ってこなくて良かったのに・・・」

生時

「（生時さんご苦労様・・・と瑠奈が生時にキスを・・・でへへ・・・）」

また生時の変な妄想が始まった。

ドラン

「ホントに作者<sup>こいつ</sup>大丈夫なのか?・・・」

上夫

「相手にしないほうがいいですよ」

ドラン

「北に向かっているのは、俺が・いや俺達が、北のある場所で魔王と戦い、勇者の剣こるという剣で魔王を封印し、そのまま地面に刺し、強力な結界で、誰にも触れないようにした。アクダーは魔王を復活させようとしている。だから、奴は封印してある剣の近くにいます」

ミサ

「でも強力な結界がはってあれば、魔王を復活させる事が出来ないから、安心じゃない」

ドラン

「いや・魔王と戦ったときも、俺とカールを合わせ、8人いた。そして、8人の力で封印した。だが、8人のうち、今生きているのは俺だけ、そのため、結界が弱まってきている。そして、アクダーが強力な力を身につけ、剣を抜いたら、魔王は復活する。」

ミサ

「じゃあ、おじいちゃんが死んじゃったら、結界が無くなっちゃうんだ」

ドラン

「待てよ・もう一人ライデンというヤツが生きてるかも・いや、間違いなく生きている。俺は老人の姿の時は魔力がほとんど使えん・そうなれば、結界を簡単に壊す事が出来る。だが、アクダーは、まだ、剣を抜き魔王を復活させていない。ライデンが生きているから、俺が老人の姿の時でも、アクダーは剣に触れる事が出来ないんだ！」

ある北の場所・・・

アクダー

「わが師、カールが死んで、結界が弱まったのに、今だ、剣に触れる事も出来ん・・・もっと、魔力を高めねば・・・」

マリー・ミーゼル

「アクダー様、たった今、部下から、ドリーマーが死んだとの報告が・・・なんでも相手は8人・・・その中に、あの勇者ドランがいたそうです。」

このマリー・ミーゼルも四天王の一人で、唯一の女性で金髪の美女である。

「そうか・・・ドリーマーが死んだか・・・（ドランが死ねば結界は解ける・・・）マリー、部下達を連れて、ドランを殺せ！」

マリー

「ハッ！」

その頃戦士達は・・・

生時

「（瑠奈さん・・・さすがに北のほうは寒いですね・・・そうね・・・でも、私が温めてあげ・・・る・・・でへでへ・・・）」

また、生時は妄想の世界に入っていた。  
そして、ドランも、

ドラ

「ワシ、帰っていいかな？マジ帰りたい・・・もうワシの時代は終わったから、帰らせて・・・」

5時間経ったため、元の老人に戻り、ミサは

ミサ

「暖かい布団で寝たいよ、あ、今日私の好きなドラマが最終回だった！観たいよ、私も帰りたい！」

と、わがママを言い、セイヤは、犬のクセに、

セイヤ

「タバコ吸いて、酒飲んで、誰か肩揉んでくれない？」

などと、言いたい放題である。

上夫は、こいつ等置いて、瑠奈、龍一、愛子の四人で行こうと本気で思い始めた。

## 第7章 アクター登場（後書き）

仕事中に、ネタ考えていたが忘れてしまった・・・

## 第8章 ジャパン・X

その頃マリイは、20人の部下を連れて、上夫たちのところに向かっていた。

その時、一人の男が、マリイたちの前に現れた。

顔には、額から頬にかけて、傷がある。かなりの修羅場をくぐってきたのであろう。

マリイ

「誰だお前は？」

謎の男

「名前なんてとくに捨てた・・・まあ、ジャパン・Xとも呼んでくれ」

マリイ

「それで、私になんか用か？」

ジャパン

「雑魚20人連れて行っても、やつ等には勝てないぜ！」

マリイ

「余計なお世話だ！」

ジャパン

「まあ聞け！俺はこの世界の人間じゃない・・・勇者ドランの仲間もそうだ・・・俺はたまたま、変なジジイが、不思議な扉から、俺のいた世界にやって来たとき、好奇心で扉に入り、この世界に来た。」

マリー

「それで？」

ジャパン

「俺は昔、ある男に仕えていた。そして俺達は、ドランの仲間、神威龍一とその妻、神威瑠奈・裏社会ではアルテミスと呼ばれるスイーパーと戦って負けた・・・」

ジャパン・Xと名乗った男・・・

それはかつて、水谷凍矢という悪魔に勝負で負け、その後、凍矢の影となった男である。

そして凍矢は、瑠奈にとって、父親と恋人の仇でもあった。

ジャパン

「まさかこんな世界で、やつ等に会うとは思ってもいなかった・・・さつきも言ったが、雑魚20人で勝てる相手じゃない」

マリー

「負けたヤツが偉そうに・・・」

ジャパン

「負けたから、やつ等の強さを知っている・・・俺はお前らのやってる事に興味はないが、あの二人を倒すために協力してやろう」

マリー

「必要ない！」

ジャパン

「いいから聞け！俺はこの世界に来る少し前に、人を操れる術を身

に付けた・・もちろん操れないヤツもいる。アルテミスを操るのは難しいが、神威龍一なら単純そうだから、操れると思う。そして、龍一を操り、アルテミスと戦わせたら面白いと思うが・・うまくいけば勇者達を全員殺す事ができる・・どうだ、いい話だろう」

それから1時間後・・

戦士達は・・

生時は妄想の世界に入ったままだし、ドランは帰りたいと叫び、ミサはドラマが見えなかったため、いじけていて、セイヤは爆睡していた。

その時、男が助けを求めてきた。

龍一

「大丈夫ですか？」

男

「アクダーの手下に村が・・」

マリー

「私から逃げられると思っているの？」

実はこれはジャパンとマリーの演技である。

ジャパン

「俺の目を見る！神威龍一！」

龍一がジャパンの目を見ると、一瞬金縛り状態になった。

瑠奈



「リュウ、その男から離れなさい！」

龍一

「えっ？」

瑠奈がジャパンに向かって、苦無を投げたが、ジャパンは避けた。

ジャパン

「お前は今から俺の手下だ！・・・龍一、アルテミスを殺せ！殺すんだ！」

龍一

「アルテミス・・・殺す・・・」

瑠奈

「リュウ・・・」

ついに龍一はジャパンに操られてしまった。

## 第8章 ジャパン・X（後書き）

凍矢については、「武勇伝」を読んでください！

## 第9章 龍一対瑠奈

上夫

「や、やばい・・・龍一さんが敵に・・・」

瑠奈

「・・・」

龍一

「殺す！」

先に攻撃を仕掛けたのは瑠奈だ！

苦無を投げたが、龍一は右のほうへ避けた。

瑠奈は龍一の動きを読み、避けたほうへ回し蹴りが決まった。だが、同時に龍一も瑠奈の鳩尾に前蹴りを放った。

上夫

「と、止めなきゃ！」

生時

「やめろ！」

上夫

「何！」

生時

「本気になったあの二人を、誰が止められるんだ！」

上夫

「・・・」

二人のものすごい攻防戦が続く・・・

マリ

「ジャパン・X・・・お前の言うとおり・・・あの二人とんでもなく強い！」

ジャパン

「当たり前だ！（アルテミス、やはり、夫でもあり、弟子でもある神威龍一が相手でも、本気で戦えるとは・・・）」

瑠奈はついに、天神流の奥義、龍神を使った。

龍神は水神・・・降りしきる大雨を、避けるのは不可能・・・まさに奥義龍神は、降りしきる大雨・・・常識を超えるスピードで相手の急所を確実に攻撃する。あまりの速さで数秒の間、相手を宙に浮かし動きを封じる・・・これが龍神である。

龍一はそのまま数十メートルふっ飛んだ！

龍一は立ち上がり、口元の血を手で拭いて、ニヤリと笑った。

上夫

「これが天神流の戦い・・・」

龍一は助走をつけ、一回転をし、かかと落とし・・・天神流の技の一つ天誅だ！

だが、瑠奈は龍一の両足をつかみ、そのまま地面に叩きつけた。

龍一はすぐに立ち上がり、今度は龍一が奥義龍神を放った。  
だが今度は、龍一の両手をつかみ、そして、鳩尾に膝蹴りを放った。

龍一

「ゴホッ！」

だが、龍一は右の上段蹴りを・・・

瑠奈はガードしようとしたが、そのまま上段蹴りから下段蹴りに変化させた。

その隙に、龍一が再び奥義龍神を放った！

今度は決まり、瑠奈がふっ飛んだ！

ジャパン

「さあ、アルテミスを殺せ！」

だが、龍一の様子が変だ。

ジャパン

「どうした？何故攻撃しない」

瑠奈

「（リュウは、アイツに支配されながらも、心の中で戦っている・・・）」

ジャパン

「どうやら、完全に支配できていないようだ・・・」

龍一

「アルテミス・・・殺す・・・殺したく・・・ない・・・殺す・・・」

ジャパン

「もういい！一度戻って来い！（やはり、あの一瞬で、龍一を支配するのは難しかったか・・・だが、時間をかけてやれば、完全に支配出来るはず・・・）」

上夫

「龍一さん！」

ジャパンたちは、龍一を連れて、一時退却した。  
その後を、戦士達は追う事が出来なかった。

## 第10章 グレーテル

ミサが魔法で瑠奈の傷を回復させた。

瑠奈

「ありがとう・・・ミサちゃん」

ドラン

「もういやゝ、ワシらの強力な仲間が敵になったんじゃぞ！もう帰るう」

生時

「早く、勇者ドラえもん・・・じゃねゝ、ドラゴンボールでもない・・・アンタだれだった？」

上夫

「アンタ、作者だろう！勇者ドランだ！」

ドラン

「ワシ、ドラム缶でいいから帰らして」

瑠奈

「ドランさん、あなたの力はどうしても必要なのです。どうか、力を貸してください！」

ドラン

「うん、分かった！こ、怖いけど、ワシ頑張る！」

生時

「（いいな・・ようし、僕も）もういや、僕らの強力な仲間が敵になったんだよ！もう帰ろう」

上夫

「帰れば・・っていうかジャマ！」

生時

「・・・ひ、ひどい・・どうせ僕なんか・・（今度こそ瑠奈さんに励ましてもらえる）」

セイヤ

「生時さん、アンタの力は・・どうでもいいけど、力を貸してくださいよ」

生時

「おめく、に、励まされたいんじゃない！」

セイヤ

「すいません・・」

生時

「僕の方こそ・・す、すまない・・励ましてくれてありがとう・・セイヤ君・・さあ、気合い入れて行こう！」

瑠奈

「生時さん、一緒に頑張りましょうね」

生時

「は、はい！（妄想じゃないよね・・瑠奈さんに励ましてもらえたんだよね・・マジ、嬉しい）」



戦士達はようやく北へ向かい始めた・・・

しばらく森の中を歩いていたら、お菓子の家を発見！

セイヤ

「腹減っていたんだ」

ミサ

「私も」

上夫

「こ、こら！勝手に食べたらダメだ！」

その時、

グレーテル

「ああ、せっかく楽しみにしていたのに・・・」

と、一人の青年が現れた。

青年も龍一のような優男だ。

上夫

「すいません・・・」

グレーテル

「まあ、皆で食べたほうが美味しいから、皆さんもどうぞ」

上夫

「俺達はいい・・・君がこのお菓子の家を作ったの？」

グレーテル

「はい！何か作ってみたかったんで・・・あつ、僕の名前はグレーテルです」

セイヤ

「グレてやる？グレたのか？愛子みたいな不良になりたいのか？」

生時

「違うよセイヤ君・・・グレーのヴォーカルのテルさん、略してグレーテルさんだよ」

上夫

「すいません・・・変なやつらで・・・」

グレーテル

「いやゝ、面白いよ・・・なんか皆さんとは仲良く出来たらいいな」

上夫

「こちらこそ」

グレーテル

「あつ、僕用事があるから・・・また会いましょうね」

上夫

「うん」

その頃、ある北の場所では・・・

アクダー

「何故、ドランを殺してこなかった」

マリー

「アクダー様、あの中に、ドランと思われる男はいませんでした」

さすがに、マリー・ミールも、泣き騒いでいた老人がドランとは思っていなかったようだ。

アクダー

「それで、その二人は？」

マリー

「強力な助っ人です」

ジャパン

「言っとくが、俺はアンタらの仲間になったんじゃないぜ！ただ、龍一コイツを使つて、アルテミスを殺したいだけだ」

アクダー

「その男女は強いのか？」

というと、手から炎が・・・

そして、龍一に向かって、炎を飛ばした。

炎が消えた時には、龍一の姿はなかった。

アクダー

「ふふっ・・・一瞬で俺の背後を取るとは・・・」

龍一は一瞬で、アクダーの背後に回っていた。

アクダー

「ジャパン・Xだったな・・・お前を今日からドリーマーの代わりに、わが四天王の一人にしてやる」

ジャパン

「おいおい、俺はお前らの仲間になる気はないと言ったはず」

アクダー

「そう言つな・・・俺の部下になれとは言わん・・・お前はお前のやりたいようにやればいい・・・ただ、俺はお前が気に入っただけ」

ジャパン

「・・・まあ、そう言うことなら・・・」

アクダー

「他の四天王も紹介しよう・・・マリー、呼んで来い」

マリー

「ハッ」

しばらくして、マリーがもう一人の四天王を連れてきた。

巨大な体格で、名はデイル・・・

マリー

「アクダー様、グレーテルがいません・・・あの子、またどこかで遊んでいるようで・・・」

アクダー

「フッ、まあいい・・・これで、魔王を復活させる事が出来れば、世

界は我らのもの・フツハハ」

果たして、戦士達は世界を救えるのか？

## 第10章 グレーテル（後書き）

今気づいたんですが、「ホープ」の時の時代は2008年なんです  
が、この物語はそれから2年くらい後の2010年で設定なんです。  
そうすると、僕は31歳という事に・・・  
それはイヤだから、「作者の力」で29歳のままにしておこう・・・

## 第11章 四天王集結

新たにジャパン・Xを四天王に迎えたアクダー。  
大魔王を復活させる時が近づいていた。

グレーテル

「アクダーさん、遅くなりましてすみません……あれ？知らない人達がいる」

アクダーたちのところへ、陽気なグレーテルがやって来た。

マリー

「アンタどこに行っていたの？」

グレーテル

「すみません姉さん、ちょっと森でお菓子の家を作っていたら、友達が出来ました」

マリー

「友だち？まったく何考えているのかしら、この子は……」

ジャパン

「お前らもしかして、姉弟か？」

マリー・ミーゼルとグレーテルは実は姉弟関係だった。

ジャパン

「俺は、今からアクダーの四天王の一人になったジャパン・Xで、コイツは俺の奴隷の神威龍一だ」

グレーテル

「あっ、どうもマリー・ミーゼルの弟のグレーテルです」

龍一はグレーテルのほうを見て微笑みながら、

龍一

「強そうだな」

と呟いた。

アクダー

「これで新たな四天王が揃ったな。早速だがグレーテル、姉と共に、俺のジャマをする馬鹿どもを始末して来い」

マリー

「かしこまりました」

グレーテル

「姉さん、アクダーさんのジャマをする人達って強いかな？」

グレーテルは、森の中で知り合った者たちが、アクダーの敵とは知らないのだ。

彼はホントに、上夫たちと友だちになったと思っているし、上夫たちも、グレーテルが四天王の一人だと知るはずもない。

その頃戦士達は、まだ森の中で休息していた。

上夫



「そろそろ行こうぜ！」

その時、皆近くに何かがあると気配を感じた。

上夫

「誰だ！」

謎の生物

「クワッ！」

ミサ

「かわいい、ドラゴンの赤ちゃんだ」

謎の生物の正体は子どものドラゴンだった。

その時、一人の老人が戦士達に話しかけてきた。

老人

「めずらしいのう、ソセゴンがワシ以外になつくなんて」

生時

「ソセゴン？俺の飲んでる痛み止めと同じ名前だ」

ミサ

「おじいちゃん、このドラゴン、ソセゴンって名前なの？」

老人

「そうじゃよ、アクダーを倒す選ばれし、戦士たちよ」

突如現れた謎の老人。

彼は一体何者なのか？

## 第11章 四天王集結（後書き）

仕事は忙しいし、調子悪いし、もう入院かな・・・

## 第12章 体調が悪い生時

老人はドランの近くにより、話始めた。

老人

「久しぶりじゃな、ドラン」

ドラン

「アンタ誰じゃ？」

老人

「まあ、分からないのも無理ないよな、50年ぶりだからな・・・  
・・・ワシはお前達と大魔王を封印した戦士の一人、ライデンじゃ  
！」

戦士たちは驚いた。  
だがドランだけは、

ドラン

「ライデン？いた電ならよくやるぞ」

と、ぼけた事を言い出した。

ライデン

「おいおい、忘れたのか？しょうがないヤツじゃ」

そっついながら、懐からお酒を出した。

ドラン

「すまんのう……武勇伝さん」

生時

「武勇伝は僕のデビュー作です」

上夫

「宣伝するな！」

ドランは、酒を飲み、若返った。

このことはライデンも知らなかったため、さすがに驚いた。

ライデン

「オメー、酒飲むと若返るのか？ええなあ」

ドラン

「久しぶりだなライデン！」

ライデン

「思い出してくれたか！それよりサブタイトルおかしくないか？普通ライデン登場とかだと思っただが……体調が悪い生時ってなんだよ」

生時

「体調が悪いんですよ……隊長じゃないですよ」

上夫

「くだらね」

ライデン

「それにしても、カールの弟子はとんでもない事をしようとしてる」

ドラン

「そうだ！こんなところで休んでいる場合じゃない」

ミサ

「疲れたー、もう少し休もうよ」

わがままを言うミサに、上夫は酒を飲ませ、大人の姿に変身させた。

ミサ

「皆、急ぎましょう」

ライデン

「オメーの孫も変わっているのう」

生時

「困ったな………瑠奈さんもいいが、大人姿のミサちゃんもいい………最後は3人仲良く暮らしました………とでも書いてやろうかな」

その時！

皆人の気配を感じた。

上夫

「誰だ！」

グレーテル

「僕です。グレーテルです。」

上夫

「君か・・・・・・・・」

グレーテル

「困ったな、せっかく友だちになれたのに・・・・・・・・」

上夫

「どうかしたのか？」

グレーテル

「姉さん・・・・・・・・ホントにこの人達なんですか？」

マリ

「そうよ・・・・・・・・皆殺しにしないさ」

上夫

「グレーテル・・・・・・・・君、まさか・・・・・・・・」

グレーテル

「アクダーさんの四天王の一人です。」

生時

「思い出した！アクダーのフルネームはウエオハ・アクダーだ！」

上夫

「作者、静かにしてろ！今度うまい棒買ってやるから」

生時

「マジ！？やったー」

上夫

「それより、俺達は君と戦いたくない」

グレーテル

「すいません……姉さんとアクダーさんの敵は僕の敵なんです」

瑠奈

「私が相手よ」

上夫

「瑠奈さん……」

今、瑠奈とグレーテルの戦いが始まるうとしている。  
果たして瑠奈はグレーテルに勝てるのか？



## 第12章 体調が悪い生時（後書き）

あゝ、ネタが浮かばない・・・

### 第13章 瑠奈対グレーテル

グレーテルと瑠奈の戦いが、今始まろうとしていた……

そして、グレーテルが一瞬微笑むと、魔法で手から剣を出し、間合  
いをつめ、先に攻撃を仕掛けた。

剣を大きく振りおろし、瑠奈の頭の近くまで……

誰もが心の中で「斬られる……」と叫んだ。

だが、紙一重で交わし、そして瑠奈の回し蹴りが決まった。

グレーテルは体勢を崩すが、瑠奈の胴を薙ぎに……

瑠奈は後ろへ跳び、またも交わした。

マリー

「（グレーテルの攻撃を二度も交わすなんて……あの女、何者？）」

グレーテル

「凄い！僕は、魔法は苦手ですが、剣術には自身があつたのに……  
でも、まだ終わりじゃないですよ」

グレーテルが構え、瑠奈が攻撃をしようとしたその時！

瑠奈目掛けて、苦無が飛んできた！

瑠奈は受け止め、飛んできた方を睨んだ……

そこには、龍一とジャパン・Xがいた。

上夫

「龍一さん……」

マリー

「ちょっと、邪魔する気？」

ジャパン

「その女は俺達の獲物だぜ！」

マリ

「何を勝手な……」

ジャパン

「勝手？フン……俺はアクダーの四天王になったが、ヤツの手下じゃない！俺は俺のやりたいようにやってもいい……そういう条件で四天王になったのを忘れたか？」

マリ

「クッ……」

ジャパン

「さあ、龍一！今度こそアルテミスを殺せ！」

龍一

「アルテミス……殺す……」

瑠奈

「リュウ……」

瑠奈とグレーテルの戦いに、ジャパンと龍一が現れ、果たして、この先どうなるのか？



## 第14章 再対決（前書き）

どうもです^^

久々に「ホープ」の番外編を書きました。

## 第14章 再対決

再び師と弟子、妻と夫の戦いが始まった。

ものすごい攻防戦であるため、作者の私にも見えなかった。

二人の体からはものすごい血が流れた。

だが二人とも戦うことをやめない。

グレーテル

「すごいな、あの二人と戦ってみたいな」

ジャパン

「いいぞ！天神流の者同士殺しあえ」

瑠奈

「リュウ、お願い、目を覚まして……」

龍一

「アルテミス……殺す……」

瑠奈

「私が死ねば、あなたは元に戻ってくれる？」

生時

「ま、まさか瑠奈さん、死ぬ気じゃ……」

瑠奈

「今までありがとう……さようなら、リュウ……」

そういつと彼女は、短刀で自らの腹を刺した。

それを見た龍一の動きが止まった。

龍一

「ルナさん……ルナさん！」

龍一は大声で叫んだ。

これは完全に元に戻ったようだ。

上夫

「ミサ！」

ミサ

「はい！」

大人姿になっているミサが、瑠奈を回復させよう瑠奈の元へ走った。

ジャパン

「マリー、その女を殺せ！」

マリー

「チッ！」

マリーは、雷の魔法でミサを攻撃した。

上夫

「ミサ！」

ドゴン！

と音が鳴り響き、煙で周りが見えなくなった。

やがて、煙が消えると、そこには片手でマリーの攻撃を受け止めたグレーテルがいた。

マリー

「グレーテル、どういづつもり」

グレーテル

「ねーさん、すみません……僕、その二人と戦いたいのです」

ジャパン

「おいおい、お前の弟には困ったものだ」

グレーテル

「早く、あの女<sup>ひと</sup>のところへ」

ミサ

「……」

ミサは急いで瑠奈の元に行き、彼女を回復させた。

瑠奈

「ありがとう」

龍一

「ルナさん、すみません……」



瑠奈

「ホント、できの悪い弟子なんだから……でも元に戻ってくれて良かったわ」

ジャパン

「まあ、いい余興を見せてもらった。礼というわけじゃないが、デイルとかいうやつが、街で暴れているぜ！」

龍一

「何！どこでだ！」

ジャパン

「メシア王国だったかな……だが、もう滅んで、次の街にいるんじゃないかな」

龍一

「皆、急ごう！」

ミサ

「グレーテル……助けくれてありがとう」

グレーテル

「へへ、龍一さんと瑠奈さん、僕が倒すまで、死なないでくださいね」

龍一

「ああ……」

マリー

「逃がさないわよ！」

グレーテル

「ねーさん……僕は、今までねーさんのいう事を聞いてきました。今度は僕のわがママを聞いてください」

マリー

「……こ、今回だよ」

グレーテル

「はい！」

龍一たちは、急いでメシア王国へ向かった。果たして彼らは間に合うのだろうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1849f/>

---

ホープ～魔法の世界にも希望を～

2011年1月4日23時24分発行